

英語特有の音声と音声変化の 指導とその効果

中 村 博 生

新潟県立看護短期大学

A Study on the Effect of Instruction of Typical English Sounds
and Sound Changes on EFL Students' Listening and Speaking Abilities

Hiroki NAKAMURA

Niigata College of Nursing

Summary The purpose of this study is to clarify the effect of instruction in both formal and informal speeches for Japanese EFL learners. The subjects were ninety-one freshmen students at Niigata College of Nursing. They had learned English for six years at junior and senior high schools in Japan. Before entering the college, they have been exposed to almost no natural English. In the experiment, the subjects participated in two language activities which were expected to develop their communication skills. In the first activity, they listened to an audio-taped passage in formal style with almost no sound changes. The students repeated it a few times to practice typical English sounds. In the second activity, the learners watched video segments in rapid colloquial style with various sound changes. They then repeated specific lines, imitating the exact wording. The results of this study indicated that the subjects improved significantly in understanding and producing the sounds typical of English and their sound changes.

要 旨 本研究の目的は、英語特有の音と音声変化の学習を行うことが学習者のリスニングとスピーキングの力を向上させるかどうかを明らかにすることである。被験者は中学校と高等学校で6年間英語を外国語として学習した経験のある新潟県立看護短期大学の1年生91名であった。この目的を達成するために、2つの言語活動を処遇として設定した。1つは、英語特有の音声を身につけるためにformalな英語が使用されている教材を用いての口頭練習である。もう1つは、音声変化の学習をするために自然な英語が話されているビデオを用いての口頭練習である。処遇の効果を測定するために、英検2級の面接テストとJACET BASIC COMPREHENSION TESTを採用した。テスト結果に対し、分散分析を行った結果、学習者のリスニングとスピーキングの力が向上したことが明らかになった。

Key word 聞く力 (listening ability)
話す力 (speaking ability)
英語特有の音 (sounds typical of English)
音声変化 (sound changes)
視聴覚教材 (audio-visual material)

1. 背景

1.1. 英語音声の知識の習得

英語の話し言葉を聞き取り、また英語で意思を伝えるためには英語の発音に関する知識を習得し、かつ調音できるようになる訓練をしなければならない段階がある。つまり、自然な速度の音声で構成される会話を聞き取りそして発話するためには、基礎的な英語の音声だけでなく、連結、脱落、同化、弱化などの音声変化が生じている音声の聞き取りや発話の練習をしなければならない^{2) 5) 9) 14)}。

Ur¹⁵⁾ は、話された英語を理解するために、学習者が正確に発音することを学べば、他の話者から発せられた音を正しく聞き取ることはさらに容易になるだろうと指摘している。また、自然でかつ口語的な会話を聞き取るための訓練には informal な母語話者の会話に多く触れ直感的に習得することが良いであろうと提案している。田島¹³⁾ は、聞く力を養うためには、ことばをただ受け身的に聞くことを通して習得しようとするだけでなく、自ら使うことによって一層確かなものに行うことができると考えられるとし、発音、語彙、文法などの知識を統合した話す能力を発達させることが必要だとしている。いずれも、話すことの高める学習を行うことにより、聞くことの高めることができる、と指摘している。そして、河野⁴⁾ は、casual なスピーチ・レベルでの音変化現象を知っている人は、formal で几帳面な発音しか知らない人より聞き取りは容易となろう、と述べている。また、Rivers & Temperley¹⁰⁾ は、コミュニケーションを学ぶ過程では、skill-getting の1つの柱としてarticulation (音連続の練習) と construction (コミュニケーション形成の練習) に支えられた production (擬似コミュニケーション) が必要であると説明している。すなわち、スピーキングの力を身につけるためには、英語特有の音声と音声変化を学習し発音できるように練習することが必要であると主張していると理解できる。さらに土屋¹⁴⁾ は調音の訓練という観点から、英語の発音で大切なことは、学習者自身が自分の発音器官を完全に制御できるようになることである、と主張した。彼の説明によれば、そのような訓練を行うことにより学習者は、英語の音声を作り出すプロセスを体験し自分自身の発音を確立するようになる、という。

1.2. 音声指導の問題点

1.2.1. 基礎的な音声の習得

日本における英語教育の現状では、基礎的な音声の聞き取りや発音の指導は比較的丁寧になされる。しかし、英語特有の音を正確に発音できるようになる学習者は多いとは言えない。その理由は、日本人学習者が英語特有の音声の特徴を習得することを次の2つの理由であきらめてしまうと推測されるからである。1つは、調音の訓練を十分に行わないために正しく音を習得できないということ¹⁴⁾ である。もう1つは、訓練の途中で英語の音声に近い日本語の音で代用してしまうということ⁵⁾ である。いずれにしても、学習者が発音の習得において困難をきたす音にはおおよそ次のようなものがあげられる。子音では、[θ]と[ð]が最も発音しにくいようであり、[s]と[z]で代用される(think, that)。次に[v]と[f]は[b]と[h](very, five)、[r]と[l]は[r]で代用され、[si:]が「シー」(season)となり、[zi]が「ジ」(houses)と発音される傾向にある。

また母音では、[æ][ɑ][Λ][ə]がすべて「ア」で代用される(catch, collar, cup, ear)。[ei]は「エー」(baby)、[ə:r]と[a:r]は「アー」(earth, car)、[ou]は「オー」(most)、[u:]は「ウー」(school)、[iə]は「イア」(here)、[Λ]は「オ」(front)などと発音される場合が多い。これらの音を正しく習得できない理由は、結局のところ学習者自身が自分の発音器官を完全に制御できるようになる(土屋¹⁴⁾)まで、訓練をすることができなかったことによると推測される。したがって、英語の音声、特に日本語に無い音を独立してあるいは単語の中で、発音できるようになるよう繰り返し訓練することが英語でコミュニケーションを円滑にするための一つの要因となろう。

1.2.2. 音変化を伴う音声の習得

基礎的な音声の学習に比べて、音変化を伴う informal なスピーチ・レベルでの音声の聞き取りや口頭練習は日本の英語教育ではあまり行われていない。ところが、ALTのスピーチや録音教材の中には、音変化(連結(for away [fɑ:rəwei]), 脱落(many [mni]), 弱化(take him [teik im]), 同化(What do you [wɔdʒu]), 無声音化(have to [hæf tə]))が生じていたり、going to が gonna となるような、リズムの関係によって変化する音の連結や脱落(小野⁹⁾)が生じるため、たとえ単語や文法などの知識があったとしても、学習者にとっては聞き取りにくく、コミュニケーションを図りにくい要因の1つとなっている。小野⁹⁾は、

「音変化」は特に英語母語話者の英語を聞き取るときには重要であるとし、さらに冠詞、助動詞、前置詞、接続詞、代名詞などの機能語 (function words) は、通常の発音では弱形が用いられることを忘れてはいけないと指摘している。また、Gimson¹¹⁾を引用して、英語は母音の長さや子音群が正しく発音されれば、母音はすべて曖昧に / ə / と発音しても、英語として通用するとさえ述べている。このことから、音変化について知識を得ることとそのような発音を習得することがいかに英語のコミュニケーションを図るうえで重要であるかがうかがえる。したがって、formal な音声の学習に加えて、このような音声変化を学習することがリスニングやスピーキングの能力を向上させる重要な要因であると推測される。

2. 目的

本研究の目的は、英語特有の音と音声変化の学習を行うことが、学習者のリスニングとスピーキングの能力を向上させるのかどうかを明らかにすることである。

3. 実験

3.1. 方法

3.1.1. 被験者

被験者は中学校、高校を通じて6年間英語を外国語として学習してきた新潟県立看護短期大学1年生91名である。

3.1.2. 実験材料

本研究では、被験者のリスニングとスピーキングの能力を測定するために、プリテストとポストテストとして英検2級面接試験⁷⁾を使用した。これらのテストは、2級の面接試験の同年同時期に実施されたAとBの二種類のテストをそれぞれ採用した。また同時に、聞くことの能力を測定するために、JACET BASIC TEST Form A と Form B³⁾をプリテストとポストテストとしてそれぞれ使用した。

処遇の学習内容としては、英語特有の音を学習するための音声教材として、formal な音声で録音されているテープ付きのテキスト⁶⁾と、音変化を学習するためのビデオ教材として、informal な音声で豊富なNBCのテレビ番組から3つのスキット⁸⁾を選んで使用した。

3.1.3. 実験手順

実験は、1995年10月から1996年2月まで週1回90分の学習を12回行った。1995年10月上旬にプリテストを、1996年2月上旬にポストテストを実施した。実験の学習活動とプリテスト、ポストテストはすべてLL教室で行った。

3.2. 指導の内容と方法

3.2.1. Formal な音声の個別指導

学習者が正確に発音することを学ばば、話された英語を理解することはさらに容易になるという指摘に基づいて、formal な表現と音声の指導を次のように設定した。教材は、学習者が興味を示し、成就感を得、そして必要感や有用感を持つように (竹蓋¹²⁾)、学習者の専門につながると思われる日常生活の科学についての情報が豊富なテキストを使用した。付属のテープはformal な発音や表現が使われていて正確な発音や表現を学習するために適切であると判断された。30分間の学習時間の中で、最初の5分間で1ユニットを学習者が自分のカセットテープに録音し、15分間で再生練習を行った。再生練習の際のポイントは、学習者が主に単語の正確な発音、文のイントネーションに焦点を置き文単位あるいはパラグラフ単位で口頭練習することである。残りの10分間で、本文の訳を確認し練習問題の答えあわせを行った。15分間の再生練習の時に教師が一人一人にインターカムで発音指導を行った。特に、子音では [θ, ð, m, ŋ, n, f, v, b, l, r, s, ʃ, z, d]、母音では [æ, ə, ɑ, ʌ] また [ɑ:r] や [ə:r] などの習得しにくい音を中心に指導した。学習者の発音できる音には個人差があるので、全体的な指導を行った後でインターカムをとおして個別に指導を行なった。

3.2.2. ロールプレイによる informal な音声の指導

自然でかつ口語的な会話を聞き取るための訓練には informal な母語話者の会話に触れ、ただ聞くだけでなく自ら使うことによって一層確かなものにする事ができると考えられる^{13) 15)}から、informal な発音や表現の指導を次のように設定した。教材は、音声変化や口語的な表現がふんだんに出てくるテレビ番組を選定し、付属のシナリオを併用しながら全部で合計12回分の教材を用意した。60分間の学習時間の中で、1回分のシーンは10分程度にとどめ、最初の視聴 (英字幕無し) はあらすじを把握することに主眼を置いた。その

後シナリオだけを見てあらすじを確認した。2回目は英字幕を併用して視聴しあらすじをもう一度確認した。おおまかにあらすじをつかんだ後で、単語や発音、イントネーションを真似て会話を行う (Rost¹¹⁾) ために、学習者の習熟の程度に適した1分前後のシーンを2つ指定し、その部分の単語や発音、文のイントネーション、耳慣れない口語的な表現を説明し口頭練習した。次に、それらのシーンを5回ずつ英字幕併用で視聴し、音声変化や口語的な表現を聞き取れるようにした。その後、シーンの登場人物の人数に合わせてグループになり役割を決め練習をした。2回のビデオに合わせた役割練習の後、グループで演じた。このように、教材の内容を理解するために、何回かの視聴の機会を設けたり、理解のための補助資料としてシナリオ (英語、日本語併用) を用意した。それぞれの補助資料を自分の理解力に応じて活用しロールプレイがスムーズにできるように工夫した。

3.3. 採点方法

英検2級の面接試験問題は、5つの各質問に対する答えが正解であれば2、若干の過不足はあるが答えとして可能であれば1とし、その他はすべて0として採点した。なお、被験者の答えとなる音声は、LL教室のテープレコーダーで録音されたものを筆者が個々に再生して採点した。また、JACET BASIC LISTENING COMPREHENSION TESTは、開拓社の採点結果の正当率を使用した。

3.4. 結果

英検2級面接試験のプリテストとポストテストの結果、平均値はそれぞれ1.33と3.27 (満点10) で (表1)、分散分析の結果、1%レベルでポストテストの得点が有意に高かった ($F(1,88) = 103.94$) (表2)。

表1 テスト別の被験者数 (N.)、最高値 (Max.)、最低値 (Min.)、平均値 (Mean)、標準偏差 (S.D.)

テスト	N.	Max.	Min.	Mean	S.D.
プリテスト	89	5	0	1.33	1.44
ポストテスト	89	8	0	3.27	2.00

表2 分散分析表

要因	SS	df	MS	F
テスト	168.14	1	168.14	103.94**
個人差	407.71	88	4.55	
残差	142.36	88	1.62	
全体	711.21	179		**p<.01

また、JACET BASIC LISTENING COMPREHEN-

SION TEST Form A と Form B の正当率の平均値は 46.37 と 49.39 (満点100) で (表3)、分散分析の結果、1%レベルでポストテストの得点が有意に高かった ($F(1,88) = 7.83$) (表4)。

表3 テスト別の被験者数 (N.)、最高値 (Max.)、最低値 (Min.)、平均値 (Mean)、標準偏差 (S.D.)

テスト	N.	Max.	Min.	Mean	S.D.
プリテスト	89	88	20	46.37	13.85
ポストテスト	89	85	25	49.39	12.92

表4 分散分析表

要因	SS	df	MS	F
テスト	406.52	1	406.52	7.83**
個人差	27362.02	88	310.93	
残差	4569.98	88	51.93	
全体	32338.52	177		**p<.01

4. 考察

英検2級面接試験の結果に基づく分散分析の結果から、本研究の目的は達成されたと考えられる。つまり、formal な英語を教材として英語特有の音を学習し、かつ informal な会話の教材を活用して音声変化の学習を行うことによって、学習者はプリテストの時点よりもポストテストの時点でリスニングとスピーキングの能力を向上させることができたと言える。また、JACET BASIC LISTENING COMPREHENSION TESTの結果に基づく分散分析の結果からも同様のことが、学習者の聞くことの力において言える。

本研究では、リスニングとスピーキングの能力を高めるために、英語特有の音を正確に発音し、聞き取ることができること、そして英語の音声変化を知識として学びかつ発音し、聞き取れるようにすることを目的として学習活動を行い、その効果を実験的に検証した。学習活動においては次の3つの点が学習者のリスニングとスピーキングの能力の向上に効果をもたらしたと思われる。第1に、英語特有の音声を学習者が母語話者と同じになるまで訓練しようと努力したことである。第2に、casual なスピーチの音声変化現象の知識を学びかつビデオ学習によりその音声変化の聞こえ方を知り、さらに自分で発音できるように練習したことである。第3に、ロールプレイにより、母語話者の発音を真似て疑似コミュニケーションの訓練を行い、シナリオ無しでも会話が流暢に成立できるまで努力したことである。

5. 教育的示唆

英語を中学校と高校で学習してきた本研究の学習者

たちが授業に期待するものは、アンケート調査では、「外国人と会話をする力」で46%にのぼる。次に期待するものは「英語による放送や映画の内容を聞き取る力」で23%である。このアンケート調査からもわかるように学習者は英語を話す力と聞く力、特に外国人との会話の場面で自分の英語の力を発揮したいという強い願望を持っている。しかし、現在の日本の英語教育では、formal な会話における表現や音声の聞き取りの学習はなされているとしても、informal な会話における表現や音声変化の学習は十分になされていないといえよう。したがって、本研究の指導が効果を示したのは基本的な音の学習と音声変化の学習の両方が学習者のリスニングとスピーキングの能力の向上に有効であったからであると推測される。例えば、

I can't push her anymore!

は、formal な会話の学習において、下線部分が [kænt puʃ hðr] のように聞き取れかつ発音するように指導したとする。するとinformal な会話で [[kænpuʃ ðr] と聞こえると、意味を理解するときに、学習者は、単語や文法の知識と照らしあわせながら何とか理解しようと試みるが、一致する語彙を探しだせずに混乱してしまう場合が多いと推測される。

このように、informal な会話では、can'tの [t] は脱落して聞こえず、her の [h] は弱化が生じて聞こえない。ところが、formal な会話の学習では、こういった現象が自然な会話の中で生じることを指導することが少なかった。そこで、本研究の指導のように、informal な会話における脱落や弱形がどのように発話に現れてくるかを指導し、学習者が自らその音を発音してみることが、自然な英語を理解する上でより重要であると思われる。そうすることによって、聞こえない音は、自分で補って聞ここうとする力が身につく、聴解力を向上させる要因の一つとなると考えられる。話す力においても同様で、自ら [knpuʃ ðr] と発音するよう練習すればおのずと音声変化の発音とともにそのもつ意味も理解できるようになると考えられる。

したがって、日本の英語教育において、リスニングとスピーキングの能力を向上させるために求められている音声指導の重要な点は次の3つであると結論づけられよう。第1点は、英語特有の音声を発音できるように学習者の発音器官を十分に時間をかけて訓練することである。第2点は、informal な会話における音声変化の学習を formal な英語と同時に指導することである。そして第3点は、学習者の興味と関心ある教材

を活用してリスニングとスピーキングの活動を十分に行うことである。

参考文献

- 1) Gimson, A. C. : The Transmission of English. In Quirk. The Use of English. Longman. London. 332. 1968.
- 2) 池浦貞彦：「聞く能力」と「話す能力」の関連. 英語教育. 大修館. 14-16. 2. 1994.
- 3) 梶木隆一：JACET BASIC LISTENING COMPREHENSION TEST. 開拓社. 東京. 1989.
- 4) 河野守夫：コミュニケーションとヒアリングのメカニズム. 英語のヒアリングとその指導 (小池生夫編). 大修館. 東京. 19-55. 1993.
- 5) 牧野 勤：英語の発音. 東京書籍. 91-103. 1977.
- 6) 中畑繁&Benson, J : VOA Everyday Science Book 2 . 南雲堂. 東京. 1991
- 7) 日本英語教育学会：2級全問題集. 旺文社. 東京. 1994.
- 8) N.B.C. : Punky Brewster. California Dreams. Shannon's Deal. CC-study. Vortex. Tokyo. 1993.
- 9) 小野昭一：英語音声の基礎. リーベル出版. 東京. 2-10. 1996.
- 10) Rivers, W. M. & M. S. Temperley : A Practical Guide to the Teaching of English. Oxford University Press. 1978.
- 11) Rost, M. : Listening In Action. Prentice Hall International. UK. 52-54. 1991.
- 12) 竹蓋幸生：ヒアリングの行動科学. 研究社出版. 東京. 118-123. 1984.
- 13) 田島 穆：ヒアリングの指導. 英語のヒアリングとその指導 (小池生夫編). 大修館. 東京. 265-286. 1993.
- 14) 土屋澄男：学習意欲へつなぐ生徒のつまずき治療法. 英語教育. 大修館. 東京. 11-12. 3. 1992.
- 15) Ur, P. : Teaching Listening Comprehension Cambridge University Press. 12-13. 1984.